

在宅介護を継続している家族介護者が介護継続意欲を持つ要因

北村美波¹⁾ 西崎未和²⁾

要 旨

在宅介護を継続している家族介護者が介護継続意欲を持つ要因を明らかにし、家族介護者が介護継続意欲を持つことができる援助を考察することを目的とした。在宅介護を継続している家族介護者1名を対象に、半構成的面接を実施し、質的帰納的分析を行った。その結果、介護継続意欲を持つ要因として計14のカテゴリーが得られ、介護者自身に関連するもの、要介護者に関連するもの、サポートに関連するものに分類された。介護者が介護継続意欲を持てるような援助として、介護者が介護の価値を見出す、介護の成果を実感できる、家族の絆を再確認できる、気分転換を図れる、肯定的な評価等の関わりが示唆された。

キーワード：在宅介護、介護者、介護継続意欲、家族看護

I. はじめに

要介護者やその家族が自宅での療養生活を選択した際、介護者の存在は非常に重要になる。また、在宅療養では介護者に大きな負担がかかることが予測され、介護による疲労や困惑を訴える患者家族と接する機会も多い。このように、在宅介護では介護負担について取り上げられることが多いが、その一方で長期に渡り在宅で介護をしている介護者が在宅介護を継続しようという意欲を持つには、何が影響しているのだろうかと考えた。

II. 研究の背景

介護者に関する研究では、介護者の介護経験を負担感やストレスといった否定的な面から捉え、関連要因の検討を行っている文献は多いが、介護者の肯定的な反応に焦点を当てている研究が少なく、最近になって見られるようになってきた^{1)~7)}。

先行研究によると、介護者全体の約65%が、介護に対する喜びや楽しさを感じている¹⁾。介護者が喜びとする内容の多くは、自分が行っている介護が何らかの好ましいかたちで介護者自身に返ってくることであり²⁾、要介護者の健康状態の改善・要介護者

からの感謝・介護についての学び・家族の絆が深まったことなどがある¹⁾。なお、介護者が喜びを感じる対象は、サービス提供者、要介護者、同居家族、親戚知人、自分自身があげられる³⁾。また介護継続意欲が高い介護者の続柄では配偶者と実子が多く、介護態度がより積極的であるといわれている¹⁾。介護を長期に継続するためには、介護者が介護の意味を見出し⁴⁾、気持ちにゆとりを持ち自分たちの在宅介護の生活を「普通の生活」と受け止めることが必要となる⁵⁾。要介護者が在宅で安心して生活するためには、主介護者も含めた支援が必要であることも示唆されている⁶⁾。

以上のように、介護者が介護継続意欲を持つ要因に関連した研究はまだ少なく、研究の蓄積には意義があると思われる。

III. 研究目的

本研究では、在宅介護を継続している家族介護者が介護継続意欲を持つ要因を明らかにし、家族介護者が介護継続意欲を持つことができる援助を考察することを目的とする。

IV. 用語の定義

本研究において、「介護継続意欲を持つ要因」とは、「在宅介護を継続しようという意欲に対し、プラ

1) 静岡県立静岡がんセンター

2) 川崎市立看護短期大学

スに影響する因子」とした。

V. 研究方法

1. 研究デザイン

質的帰納的研究デザイン。

2. 研究対象

在宅介護を継続している家族介護者(主介護者)1名を対象とした。

3. データ収集方法

同意を得られた対象者にインタビューガイドを用いて、半構成的面接を実施した。面接は対象者の自宅で、対象者の時間の都合に合わせて訪問し要介護者の居室とは別室にて行った。面接時間は約60分であった。面接は、介護継続意欲について探るため、以下の内容を自由に表現してもらった。

- 1) 在宅介護が始まったきっかけ
- 2) 介護をしている中での喜び
- 3) 介護継続意欲を持つ場面
- 4) 介護者にとっての介護の意味
- 5) 介護を継続できている理由

会話は対象者に了解を得てテープレコーダーで録音した。

4. データ収集期間

平成18年9月。

5. 分析方法

分析は以下の手順で行った。

- 1) 録音した面接内容から逐語録を作成した。
- 2) 介護者が介護継続意欲を持つ要因と考えられる記述部分を抜き出した。
- 3) 内容の意味を損なわないよう要約し、同様の意味を持つものに分類した。
- 4) 分類したものに名前をつけカテゴリーとした。

なお、分析は共同研究者間で合意が得られるまで繰り返し、妥当性の確保に努めた。

6. 倫理的配慮

研究対象者に対し、研究のテーマ、目的、意義、内容とともに、研究参加は自由意志であり研究途中でも不参加の意思を表明できること、調査は匿名であること、インタビュー内容を録音させていただく

こと、インタビュー内容は本研究以外には使用しないという事を紙面と口頭で説明し、対象者の承諾の署名をいただいた。

VI. 結果

1. 研究対象者の概要

1) 主介護者

50歳代前半、女性。要介護者の実子にあたる。在宅で介護を始めるまでは、中学の英語教師をしていた。入院中の実父(要介護者の夫)がおり、自宅から車で15分の病院にほぼ毎日通っている。

2) 要介護者

80歳代、女性、アルツハイマー型認知症、要介護度4。ほぼベッド上で過ごしており、認知症により日常生活動作に支障があるため、全般的に介助や見守りを要する。食事は、摂食動作に問題はないが見守りが必要な状態である。移動は手すりを掴みながら歩行が可能だが、不安定であり転倒したこともあるため、見守りや必要時介助を要する。デイサービスにて入浴(週3回)をしている。尿失禁があり、オムツを着用しているが状態に応じトイレにて排泄している。認知の程度は、むらがあるが主介護者が実娘という認識はあり、時折、認識がしっかりとすることがある。

3) 介護継続年数

2年8ヶ月。

4) 家族構成

介護者、要介護者、介護者の夫、介護者の娘の4人暮らし(図1)。

5) 社会資源の活用状況

デイサービス3回/週、ショートステイ4泊5日/月、福祉用具貸与(介護用ベッド、歩行器)、住宅改修(手すりの取り付け)を利用している。

6) 在宅介護までの経過

介護者の自宅で介護が始まるまでは、同居はしておらず、要介護者夫婦は2人暮らしをしていた。しかし、要介護者の認知症の進行と要介護者の夫の病状悪化により、介護が必要な状態となり、2人で生活するのが困難となった。介護者の兄弟間で話し合いをした結果、要介護者夫婦を介護者の自宅に引き取ることとなった。同居して3日目に要介護者の夫が心不全で倒れ、入院生活となる。

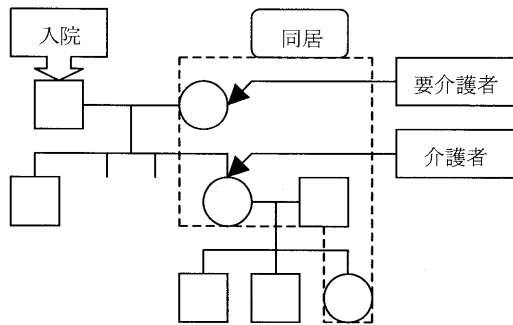


図 1：家族構成

2. 在宅介護を継続している家族介護者が介護継続意欲を持つ要因

インタビューの内容を分析した結果、介護継続意欲を持つ要因として、＜人としてすべきこと＞＜要介護者との思い出＞＜医療・施設への不信感＞＜自分なりの介護の工夫の成功＞＜自分の人生を大切にすること＞＜介護を始めて得たもの＞＜要介護者の状態の改善＞＜緊急時の対処が可能＞＜要介護者の健康管理が可能＞＜要介護者の感謝の言葉・反応＞＜在宅介護前の要介護者の乱れた生活＞＜公的サービスによる支え＞＜家族の協力＞＜介護をしている友人との交流＞の14のカテゴリーが得られ、さらに何に関連するものかによって、介護者自身に関連するもの・要介護者に関連するもの・サポートに関連するものの3つに分類された(表1)。

以下「」の中は、インタビューからの引用とする。引用箇所だけでは文脈を捉えられない場合は研究者が（）の中に言葉を補った。

1) 介護者自身に関連するもの

＜人としてすべきこと＞

介護者は、要介護者(実親)の介護を人としてすべきことであると捉えていた。この思いは、インタビューの中でも繰り返し「人として生まれたからには、人として生きていく。」「人としての気持ちと、私自身も後悔したくないと思った。」「(介護をしようと思ったのは)まず、人道支援。」と表現され、介護開始時の決断や介護継続意欲を持つ根底の部分に常にある思いであった。また、介護をすることで、要介護者にも人間らしい生活をさせてあげることができると考えており、このような思いが介護の原動力として介護継続意欲に作用していた。このような要因を＜人としてすべきこと＞とした。

＜要介護者との思い出＞

介護者が幼い頃の要介護者との関わり、すなわち親子としての思い出が現在の介護意欲につながっていた。「何が支えかっていった時に、ふとした言葉を思い出すのね、母親が私に言ったこととか。」「母とは、(子供の頃)ずっとべったりだったため思い起こすことが多い。」と表現していた。また「自分が子供の時にしてもらったことを返している…そういうサイクルっていう感じがするかな。」というように、幼い頃に要介護者にしてもらったことと、現在要介護者に行っていることの変化を「サイクル」と捉えている。このような要因を＜要介護者との思い出＞とした。

＜医療・施設への不信感＞

父親が介護者宅に来る前に、不必要な薬を処方されていたことや、ショートステイを利用した状況について「母親をショートステイに送ると、ずっとお通じがなかったりする。」「(ショートステイを利用すると)お尻のところがちょっと赤くなって血が出たりすることもある。」「4泊5日が限度かなと思っている。」と表現していることから、介護者は、医療や施設に対しあまり良い印象を持っていない。このような不信感が、病院・施設に任せきりにしたくないという思いにつながり、介護継続意欲の要因となっていた。このような要因を＜医療・施設への不信感＞とした。

＜自分なりの介護の工夫の成功＞

2年8ヶ月の介護経験の中で、要介護者の状態の変化や環境に合わせた介護者なりの介護の方法を見出し、実際に結果として出ていることが喜びとなり、介護のやりがいにつながっていた。この成功経験がよりよい介護方法を模索しようという介護継続意欲につながっていた。介護者は、「自分なりの工夫で介護の方法を見つけ、成功した時は嬉しいですね。」「(全部一度に並べてしまうと味噌汁の中にうなぎを入れて食べようとしたりしてしまうため)今は、ふたつとかひとつくらいずつ並べるようにしている。」と具体的な工夫もあげ表現していた。このような要因を、＜自分なりの介護の工夫の成功＞とした。

＜自分の人生を大切にすること＞

介護者は、「外に出て行かないとだめですよ。」「自己犠牲的なものだったら絶対息が詰まっちゃって長続きしないと思うので。」「積極的にそういうお声(誘い)がかかればなるべく…(参加している)。」というように自分の時間を作り、積極的に気分転換

を図り、外とのつながりを持つことが、介護の継続に影響していた。また「自分自身もまだまだやりたいことがある。」「仕事を辞め英語を話す機会がなくなるため、近所の公民館の英会話教室に通っています。」と表現し、英語教師という自分のキャリアを大切にしていた。これらの要因を＜自分の人生を大切にする＞とした。

＜介護を始めて得たもの＞

「人の優しさが身に染みます。そして、自分も人に優しくありたいと思いますね。」「アルツハイマーの本や介護の本、死に関する本を読みあさりました。」「ある程度のストレスは、人を成長させると思いました。」「介護サービスそのものに対する見方が変わりました。」「家族の良いところも見られるし、お互いにいい刺激になっている。そういうのがあるからやっていけるなって感じがしますね。」と表現しているように、介護者は介護を始めたことにより新たな自分自身の成長、気付き、学びを得ており、これらが介護継続意欲を持つ要因となっていた。この要因を＜介護を始めて得たもの＞とした。

2) 要介護者に関連するもの

＜要介護者の状態の改善＞

介護者が「栄養状態も、こっちに来てしばらくしてから血液検査をしたら、良くなっていた。」「歩けなかったのが、歩けるようになりました。」「母親はずいぶん変わり、改善が見られましたね。」「こっちに来て寂しさが解消されたのでしょうかね。」と表現しているように、介護の結果、要介護者の状態の改善がみられることは、大きな喜びとなっていた。この思いが介護継続意欲の要因となっており、このような要因を＜要介護者の状態の改善＞とした。

＜緊急時の対処が可能＞

「(転倒時に)もし気が付かなかっただけで、もう失禁してしまっていたから、風邪をひいて大変なことになっていたと思う。」「吐血をしちゃったりして、救急車を呼んだんだけど…。そういう大きなことがあった時にも、すぐに対処できるしね。」とあるように、実際にこれまでの介護生活の中で緊急時に対処できたこと、また「何があっても対処できるし、そのためにそばにいますので介護をしている方は安心。」と表現されているように、身近で介護をしていることが介護者の安心になり、介護継続意欲に関連していた。このような要因を＜緊急時の対処が可能＞と

した。

＜要介護者の健康管理が可能＞

「健康面に関して管理ができるというのは在宅でないと、という気持ちがありますね。」「健康状態なんかを毎日接するから把握できますよね。」「排便も身近にいて管理してあげることができる。」「薬を管理することができる。」というように、高齢者の2人暮らしであった頃に比べ、そばで介護をすることで要介護者の身の回りの管理ができると感じていた。このような要因を＜要介護者の健康管理が可能＞とした。

＜要介護者の感謝の言葉・反応＞

「母が"私には神様がついていてくれた"と言ったんですよ、その言葉は今でもやっぱり支えかなという感じがしますね。」「靴下なんかを履かせてあげると"ああそんなことまでしてもらって悪いね"とか、トイレに連れて行った時にも"あなたにはずいぶん長いこと世話をかけているね"と、感謝の気持ちが出る人でそういう言葉が聞けるのはありがたい。」といった要介護者の感謝の言葉、「母が嬉しそうに笑ったりするのを見るのはやっぱり喜びですよ。」「表情が変化した。」「私のところに来た時にすごく喜んでくれたんですよ。」といった介護者が行っている介護に対する要介護者の喜ばしい反応が介護をしている上での喜びとなり、介護継続意欲の要因となっている。このような要因を＜要介護者の感謝の言葉・反応＞とした。

＜在宅介護前の要介護者の乱れた生活＞

要介護者は、介護者と同居するまで要介護者と要介護者の夫(介護者の両親)の2人暮らしであったため、要介護者の認知症が進行するにつれ家事に支障が出るが多くなり、規則的な生活が送れなくなってしまっていた。その時の生活の様子について介護者は、「本当にひどい状態だったんですね。」と話しており、もうそのような生活をさせたくないという思いが介護継続意欲を持つ要因となっていた。このような要因を＜在宅介護前の要介護者の乱れた生活＞とした。

3) サポートに関連するもの

＜公的サービスによる支え＞

公的サービスの利用は、「基本的に今お風呂は、デイサービスでお願いしています。」「デイサービスで体温・血圧・体重などを測ってくれるため助かつ

ている。」というように、介護者の介護負担の軽減となっていた。また、「ケアマネージャーさんや福祉用具レンタル業者さんのアドバイスはとても役に立ちます。」「頼りになりました。」「自分を追い詰める必要はない」と言ってくれた。」「(父の様子に異変を感じ) どうしようと思った時に、レンタル業者さんが"遠慮することないわよ。救急車よ。"と言ってくれた。」「人(ケアマネージャー)に評価されることで自分の苦勞が報われる。」「(ケアマネージャーが)自分の携帯番号を教えてくれて、"休みの日でも何でも困った時は電話していいですよ"と言ってくれてとてもありがたかった。」といったケアマネージャーや福祉用具レンタル業者などの専門職の気持ちのこもった関わりが介護をする上での精神的な支えとなり、介護継続意欲を持つ要因に関連していた。このような要因を「公的サービスによる支え」とし

た。

＜家族の協力＞

「介護をする上で1番大事なのは家族ですね。」「家族が好意的、協力的でないと…(介護を続けられない)」というように、介護者にとって家族の協力は介護継続意欲に大きな影響を与えており、家族の協力は、主介護者の介護負担の軽減とともに精神的な支えとなっていた。このような要因を「家族の協力」とした。

＜介護をしている友人との交流＞

介護者は、同年代の介護をしている友人から情報を得たり、介護をしている者ではないとわからない苦勞を共有したりしていた。これが、介護を継続する上での気分転換の場になっていた。この要因を「介護をしている友人との交流」とした。

表1 在宅介護を継続している家族介護者が介護継続意欲を持つ要因—カテゴリとそこに含まれる内容—

①介護者に関連するもの

＜人としてすべきこと＞

人間らしい生活をさせてあげられる。

介護をしようと思った1番の理由は、人道支援。

人として生まれたからには、人として生きていく。

学校の授業で『マザー・テレサ』を教えた時、両親は道端に倒れていないだけで、助けを求めている人たちと同じだと感じ、子供にこんなことを教えていて自分は何をやっているのだろうと思った。

人としての気持ちと後悔したくないという気持ちがあった。

同居していない時のひどい状態のまま施設に入っていたら、親は悲しみのうちに死んでいかざるを得ない。

施設でよくしてもらったとしても、家族が一生懸命介護をした上で、病院や施設に入ったのとはわけが違う。

両親に対して色々介護をした結果、どうしてもなく施設に頼むならば納得がいくが、兄弟誰一人として親孝行をせずそのまま施設に入れてしまうのは納得がいかなかった。

小さくなった母の背を見て、神様は私を試しているのではないかと思う時がある。

＜要介護者との思い出＞

自分が子供の時にしてもらったことを返すというサイクルだと感じる。

幼いころの自分に母が言った言葉をふと思い出すことがあり、それが支えとなっている。

父親は単身赴任であり、母とは子供の頃ずっと一緒にいたため思い起こすことが多い。

＜医療・施設への不信任＞

ショートステイを利用すると、ずっとお通じがない時がある。

ショートステイを利用すると、お尻のところが赤くなって血が出ている状態で帰ってくることがある。

ショートステイを利用するのは、4泊5日が限度だと思っている。

特養などが改善されて、入所者や家族の人が安心して住めるような施設にしていける必要がある。

父は誤診により病状の悪化につながった。

＜自分なりの介護の工夫の成功＞

自分なりの工夫で介護の方法を見つけ、成功したときは嬉しい。

食事は全部を一度に並べるのではなく、1～2品ずつ出すようにしている。

＜自分の人生を大切に＞

外に出て行くことが大切である。

介護が自己犠牲的なものだったら、絶対息が詰まって長続きしない。

友人から誘いがあれば積極的に参加している。

ショートステイの時に、元同僚と旅行に行く。

元同僚が集まる機会には参加している。

公民館の英会話教室に通っている。

両親を悪い状況で引き受けることとなったため、仕事は辞めざるを得なかった。

定年退職をしたわけではないので、何か別なことがしたい。

自分のこれからの生き方を考えさせられる。

父親・母親のためだけに生きているのではなく、自分の人生を生きている。

自分も生きているから、介護に全部を捧げるというわけにはいかない。

自分自身もまだまだやりたいことがある。

＜介護を始めて得たもの＞

人の優しさが身に染み、自分も優しくありたいと思う。

介護サービスそのものに対する見方が変わった。

アルツハイマーや介護、死についての本を読みあさった。

ある程度のストレスは人を成長させる。

家族の良いところが見られ、お互いの良い刺激になっている。

②要介護者に関連するもの

＜要介護者の状態の改善＞

血液検査の結果、自宅に引き取ってから栄養状態がよくなった。

歩けなかったのが、歩けるようになった。

自宅に引き取ったことで母親はずいぶん変わり、改善が見られた。

母は寂しさが解消された。

表情が変化した。

＜緊急時の対処が可能＞

転倒時にすぐ気付くことができた。

吐血があった時、すぐに対処することができた。

そばにいて何があっても対処できるし、安心である。

＜要介護者の健康管理が可能＞

そばにいて健康管理を行うことができる。

毎日接するため健康状態の把握をすることができる。

排便を管理することができる。

薬を管理することができる。

＜要介護者の感謝の言葉・反応＞

「私には神様がついていてくれた。」という母の言葉が今でも支えになっている。

「ああそんなことまでしてもらって悪いね。」「あなたにはずいぶん長いこと世話をかけているね。」などの感謝の言葉が出る。

感謝の言葉が聞けるのはありがたい。

母が嬉しそうに笑ったりするのを見るのは喜び。

自分の家に来た時にすぐ喜んでくれた。

<在宅介護前の要介護者の乱れた生活>

両親の生活が本当にひどい状態だった。

同居前は、昼の12時まで寝ていたことが多くあった。

父親は連れてきて3日目に心不全で倒れたため、もし、連れてきていなかったらもう亡くなっていたかもしれない。

③サポートに関連するもの

<公的サービスによる支え>

住宅改修をした。

ショートステイを毎月4泊5日入れている。

デイサービスにて入浴している。

デイサービスに行くこと外からの刺激を受けられるので母にとっても良い。

デイサービスで体温・血圧・体重などを測ってくれるため助かっている。

デイサービス・ショートステイを使うことで自分の時間を作ることができる。

ケアマネージャーやレンタル業者のアドバイスはとても役立つ。

在宅介護を始めた時、ケアマネージャー・レンタル業者が頼りになった。

介護はいたわりの言葉なしにはやっていけない。

人から評価されることで自分の苦勞が報われる。

「自分を追い詰める必要はない」というケアマネージャーの言葉

父の様子に異変を感じ、どうしようと思った時に、レンタル業者に「(救急車を呼ぶことを)遠慮することないわよ。」と言ってもらった。

ケアマネージャーが携帯番号を教えてくれて、いつでも困った時は電話をしてくれていいと言われ、とてもありがたかった。

<家族の協力>

介護をする上で1番大事なのは家族である。

家族が好意的・協力的でないと続けられない。

介護を始める際、夫がケアマネージャー・レンタル業者・エレベーターの設置などを手配してくれ、とても助かった。

父親の病院に行っている間は、夫が母をみてる。

夫が協力してくれるため友人と旅行に行くことができる。

要介護者は自分の両親であるため、夫の協力は必要。

娘が要介護者をトイレに連れて行ってくれたり手伝いをしてくれた。

<介護をしている友人との交流>

同年代の介護をしている知り合いから情報を得たり、介護をしている者ではないとわからない苦勞を共有したりする。

VII. 考察

本研究において、家族介護者が介護継続意欲を持つ要因として、介護者、要介護者、サポートの3つの側面があることが明らかとなった。

1. 介護者について

介護者については、介護を始めたことが、自分自身の人生を見つめ直すきっかけとなっていることがわかった。本研究の介護者は、在宅で介護をするこ

とをきっかけに仕事を辞めたという背景もあるため、介護者が介護をどのように捉え価値づけるかが、介護を継続していく上で大きく影響していると考えられる。これは、「介護を長期的に継続するためには、介護者は介護の意味を見出すことが重要な要因となる⁴⁾」という林の先行研究の結果と一致していた。したがって、介護者が感じていることを表出できる関係性を作り、介護者の思いをフィードバック

していくような関わりが、介護の意味づけや介護の価値を見出すための援助になると考えられる。本研究の介護者は、介護を<人としてすべきこと>と考えていることが介護継続意欲の根底にあった。介護者自身の成長、気付き、学びといった<介護を始めて得たもの><介護者なりの介護の工夫の成功>は介護者の喜びや自信につながり、介護を継続していく上での要因になっていた。これらも、介護の意味づけに関連していると考えられる。また、サポートを得ながら<自分の人生を大切にすること>を心にかけていることも、介護を継続できる要因であることがわかった。また、斉藤らが述べているとおり介護者が要介護者の実子にあたることも、介護態度が積極的である要因である¹⁾と考えられる。これは、<要介護者との思い出>に見られるように介護者の幼い頃の要介護者との関わり・親子関係が関連していると考えられる。鈴木らは、家族の関係性に働きかける援助方法のひとつとして、家族の絆を意識させることを挙げている⁸⁾。介護者に要介護者とのよい思い出を話してもらうなど、互いの結びつきを再確認してもらうことも介護者が介護を続けていく力になると考える。また、<医療・施設への不信感>などの介護者の価値観が、在宅で介護をするという決断や介護継続意欲に関係していることもわかった。また、本研究では、要介護者の夫（介護者の実父）が入院しているという背景もあった。介護者は、様々な背景・役割を持っているため介護者を取り巻く環境を踏まえた援助が必要であると考えられる。

2. 要介護者について

本研究の結果から、要介護者に関連する介護継続意欲を持つ要因があることがわかった。在宅で介護を行うことをきっかけに同居したため、同居前に比べ<要介護者の健康管理が可能><緊急時の対処が可能>となり、介護者の安心感が生まれ介護継続意欲をもたらしていた。また、<要介護者の状態の改善><要介護者の感謝の言葉・反応>といった自分の行った介護の結果が明らかになることが喜び、支えになっていた。桂は、「介護者が喜びとする内容の多くは、自分が行っている介護が何らかの好ましかたちで介護者自身に返ってくることであった。

²⁾」と述べている。したがって、看護専門職として要介護者の状態の改善を伝えるなど、介護者が介護の成果を実感できるような関わりが介護継続意欲

を持つ上で有効であると考えられる。本研究の介護者の介護に対する肯定的な気持ちが介護継続意欲につながっていた。斉藤らは「介護継続意向と介護の肯定的側面（介護に対する主観的な楽しみや喜びの感じ方、介護満足感）には関連がある¹⁾」と述べており、同様の結果が得られた。また、本研究の介護者は、<在宅介護前の要介護者の乱れた生活>が悲惨なものであったと捉えているため、「もうそのような生活はさせたくない」という強い思いも介護継続の原動力となっていた。

3. サポートについて

サポートに関連する介護継続意欲を持つ要因として、デイサービスやショートステイなどの<公的サービスによる支え>は、介護者の介護負担の軽減とともに自由な時間を作り出す機会となっていた。介護者は自由な時間を使い、気分転換を図る、自分自身のキャリアを大切にするなど社会とのつながりを持つことができていた。介護者が精神的・身体的にゆとりを持ち介護に取り組めるように、介護者が気分転換や自分の時間を持てるよう配慮をする必要がある。介護者に対する専門職の関わりは、介護者にとって、大きな支えとなっているため、看護専門職としてケアを提供するだけではなく、介護者に対するいたわり、肯定的な評価、心のこもった声かけが必要であると考えられる。<介護をしている友人との交流>は、負担の大きい介護を継続していく上で重要な場となっていることがわかった。同じ境遇にある介護者同士が交流を持てるよう、地域で実施されているセルフヘルプグループの活動があれば、紹介していくことも介護継続意欲につながる援助のひとつと言える。インフォーマルサポートである<家族の協力>は、身体的・精神的サポートになっており、介護者が在宅で介護を継続していくに当たり、不可欠な存在であることがわかった。介護者が家族からの支えを得られるよう、家族にできることを伝えるなど、家族に対しても働きかけることが有効と考えられる。

VIII. 結論

1. 在宅介護を継続している家族介護者が介護継続意欲を持つ要因

インタビュー内容の分析をしたところ、以下の14のカテゴリーが得られた。

【介護者自信に関連するもの】＜人としてすべきこと＞＜要介護者との思い出＞＜医療・施設への不信感＞＜自分なりの介護の工夫の成功＞＜自分の人生を大切にすること＞＜介護を始めて得たもの＞

【要介護者に関連するもの】＜要介護者の状態の改善＞＜緊急時の対処が可能＞＜要介護者の健康管理が可能＞＜要介護者の感謝の言葉・反応＞＜在宅介護前の要介護者の乱れた生活＞

【サポートに関連するもの】＜公的サービスによる支え＞＜家族の協力＞＜介護をしている友人との交流＞

2. 介護者が介護継続意欲を持つことができる援助
介護者が介護継続意欲を持てるような援助として、以下の内容が示唆された。

- 1) 介護者が感じていることを表出できる関係性を作り、介護者の思いをフィードバックしていくような関わりが、介護の意味づけや介護の価値を見出すための援助になる。
- 2) 要介護者の状態の改善を伝えるなど、介護者が介護の成果を実感できるような関わりが介護継続意欲を持つ上で有効である。
- 3) 要介護者とのよい思い出について話してもらうなど、家族の絆を再確認できるよう援助する。
- 4) 介護者が気分転換や自分の時間を持てるように配慮する。
- 5) 看護専門職としてケアを提供するだけではなく、介護者に対するいたわり、肯定的な評価、

心のこもった声かけが必要である。

6) 介護者同士が交流を持てるよう、地域で実施されているセルフヘルプグループの活動があれば紹介していく。

7) 介護者が家族からの支えを得られるよう、家族にできることを伝えるなど、家族に対しても働きかける。

IX. おわりに

本研究を行い、介護者が介護継続意欲を持つ要因といった介護の肯定的な面に焦点を当てることができ、在宅で介護を行っている家族介護者に対する援助を考察することができた。今後在宅で介護を行っている家族介護者との関わりに生かすことができると考えられる。しかし、今回の研究では対象者が1名であるため、介護者一般にあてはめていることは困難であった。在宅で介護を行っている介護者には、様々な背景があると考えられるため、要介護者・介護者の状況、利用しているサービス、続柄、介護継続年数などの状況を踏まえ、今後も介護継続意欲を持つ要因を明らかにし具体的な援助方法を見つけていく必要があると考えられる。

謝 辞

本研究を行うに当たりご協力いただき、貴重なご意見をお寄せいただいた介護者の方に深く感謝致します。

引用・参考文献

- 1) 斉藤恵美子ほか：家族介護者の家族に対する肯定的側面と継続意向に関する検討、日本公衆衛生雑誌、48(3)、p. 180-189、2001.
- 2) 桂晶子：高齢者を介護する家族が感じる介護の喜びについて、日本看護科学学会学術集会講演集、20、p. 299、2000.
- 3) 山内豊明ほか：訪問看護を利用している在宅要介護者の家族介護者が感じる喜び、医療マネジメント学会雑誌、4(2)、p. 304-310、2003.
- 4) 林裕栄：長期に在宅介護を継続できている介護者の要因 - 介護者の介護受容プロセスとの関係から -、埼玉県立大学短期大学部紀要、4、p. 61-71、2003.
- 5) 隅田好美：長期在宅療養を続けるための要因 - 筋萎縮性側索硬化症(ALS)患者と家族への質的調査を通して -、日本在宅ケア学会誌、6(3)、p. 51-58、2003.
- 6) 浜舘敦子：在宅生活している高次脳機能障害者の主介護者の介護状況と介護負担との関連、神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録、30、p. 298-304、2005.
- 7) 赤澤寿美ほか：痴呆性高齢者の在宅介護長期継続と介護中断に影響する因子の検討、日本地域看護学会誌、4(1)、p. 76-82、2002.

8) 鈴木和子・渡辺裕子：家族看護学－理論と実践 第3版. 日本看護協会出版会、 298p. 2006,